

ラーキンの ‘Mr Bleaney’ について

宮 内 弘

フィリップ・ラーキン (Philip Larkin) の ‘Mr Bleaney’ はアンソロジーピースとして彼の詩の作品の中ではよく知られたものであり、彼の特色がよくでた詩でもあるが、彼の詩になじんだことのない読者は少々面食らうであろう。一見したところ、とりわけ最初の五連では、口語的あるいは俗語的な響きのことばも入り交じり、想像をかきたてる美しい詩語や、豊かなふくらみのある単語はあまり見あたらないようである。詩の場面をとってみても、何の変哲もない日常的な設定で、とりたてて一般の読者の注目を引くようなものはほとんどないと言ってもよい。詩人も充分これを意識していて、わざとひからびて、やせた土壌に身を置き、対象から距離をおきながら、極力抑えた筆致で淡々と叙述を進めていくのである。ところが最後の二連では文体は大きく変わり、これまで退屈気味だった読者は、急速に詩の中に引き込まれてしまう。

本稿では、ブリーニーさんと詩の話者（ラーキン）との微妙な関係や文体に充分注意を払いながら、この詩のおもしろさの秘密の一端を探っていきたい。

‘This was Mr Bleaney’s room. He stayed
The whole time he was at the Bodies, till
They moved him.’ Flowered curtains, thin and frayed,
Fall to within five inches of the sill,

Whose window shows a strip of building land,
Tussocky, littered. ‘Mr Bleaney took

My bit of garden properly in hand.'
Bed, upright chair, sixty-watt bulb, no hook

Behind the door, no room for books or bags—
'I'll take it.' So it happens that I lie
Where Mr Bleaney lay, and stub my fags
On the same saucer-souvenir, and try

Stuffing my ears with cotton-wool, to drown
The jabbering set he egged her on to buy.
I know his habits—what time he came down,
His preference for sauce to gravy, why

He kept on plugging at the four aways—
Likewise their yearly frame: the Frinton folk
Who put him up for summer holidays,
And Christmas at his sister's house in Stoke.

But if he stood and watched the frigid wind
Tousling the clouds, lay on the fusty bed
Telling himself that this was home, and grinned,
And shivered, without shaking off the dread

That how we live measures our own nature,
And at his age having no more to show
Than one hired box should make him pretty sure
He warranted no better, I don't know.

「ここはブリーニーさんの部屋でした。車体工場で働いていた間、ここにずっといましたが、やがてよそに運び出されてしまいました。」
薄くて、すり切れた花模様のカーテンが
敷居から5インチの所までさがっている。

窓からは、草がおい茂り、ごみの散らかった、細長い
建築用地が見える。「ブリーニーさんはきちんと
小さな庭の世話をしてくれました。」
ベッド、背のまっすぐな椅子、60ワットの電球、戸の後ろには

物を掛けるかぎもなく、本やかばんを置く場所もない。
「貸してもらいましょう。」そこで私はブリーニーさんが寝ていた所に
横になり、同じみやげ物の受け皿で、
タバコのすいがらをもみ消し、彼がおかみさんにせがんで買わせた

やかましいラジオの音を消すために
綿で耳をふさごうとする。
私は彼の習慣がわかっている。何時に下に降りてきて、
肉汁（グレービー）よりソースを好み、なぜ

サッカーの4つの遠征試合に根気よく賭け続けていたかを。
同様に年間の枠組みも知っている。
夏休みにはフリントンの人々の家に泊り、
クリスマスにはストークの妹の家で過ごしたことを。

しかし、彼がたたずんで、冷たい風が
雲をかき乱すのを見つめ、かび臭いベッドに横になり、
これが自分の家だとひとりごとを言って、にやりと笑い、
いかに生きるかが我々自身の本質を測ることになるという不安を、

また、彼のような年になっても、人に見せられるものといえ
借りた箱一つしかないというのなら、彼にはもうこれ以上の
物は保証されないことを確信しなければならないような不安を
払いのけられず、震えていたのかどうか私にはわからない。

この詩にはブリーニーさんと詩の話者と下宿のおかみさんとが登場する。ま
ず下宿のおかみさんのことばでブリーニーさんのことが過去形で語られる。

ティムズ (David Timms) によればブリーニーさん (Mr Bleaney) という名前は 'bleak' と 'mean' と指小接尾辞 'ey' から成り立っているという。¹⁾ 次に部屋の様子が淡々とした筆致によって現在形で描かれているが、すぐその後でまた下宿のおかみさんによって、ブリーニーさんのことが過去形で述べられている。そして第2連の最後の行では再び、小さな部屋の中の様子が動詞を使わずに名詞だけを連ねる形で描かれている (後の表を参照)。ここまでの描写はブリーニーさんや彼の住んでいた部屋の様子が詩の話者から距離をおいてなされているのである。そこには話者の感情などまるで入る余地などなく、ブリーニーさんと彼との間には大きな隔たりが存在するようにみえる。またこれまでの部屋の描写では、この部屋が魅力的である要素はほとんどないと言っている。必要最少限の家具や道具があるだけで、それらも最低の機能を果たすだけである。花模様のカーテンも薄く、すり切れており、夢をかきたてるようなロマンティックな物は何もないのだ。ここまでの部屋の描写によって話者は、読者にはあまり借りる気がしないように思わせておきながら、次にいきなり「この部屋を貸してもらいましょう。」と言って読者に軽い驚きをあたえる。このことは、話者が何らかの意味でブリーニーさんに共感を覚えたものと想像される。いや、単なる共感ではこのような魅力のない、牢獄のように小さい部屋を借りることはできなかったであろう。第2連 (実際は第3連の1行目まで行跨りで続いている) までは、話者は全くの傍観者であったが、第3連からは詩の場面に参入してくることは重要である。ここに至って話者はブリーニーさんを自分と重ね合わせて無意識のうちにも彼と同化しようとしていたのではあるまいか。そして「そこで私はブリーニーさんが寝ていた (lay) 所に横になり (lie), 同じみやげ物の受け皿で、タバコのすいがらをもみ消し、……」 (So it happens that I lie / Where Mr Bleaney lay, and stub my fags / On the same saucer-souvenir, ...) ということばによって第2連まで距離をおいていたブリーニーさんと話者との一体化がより顕著になるのである。

ここで見落としてはならないのは、それに付随してブリーニーさんの描写に使われていた過去形 (lay) が現在形 (lie) と合体していることである。こうしてブリーニーさんにまつわる過去形が現在にじわじわしみだしてきて混然と二人は一体化しようとするのである。またこの箇所でも俗語 ('stub', 'fag') が使われているが、これによって労働者であったブリーニーさんへの話者の強い共感が感じとれよう。ところが、ラーキンは次の瞬間には二人の間にくさびをうちこむのである。つまりブリーニーさんが下宿のおかみさんにせがんで買ってもらったやかましいラジオ²⁾の音を「私」は耳に綿をつめて聞こえないようにするのである。(... and try / Stuffing my ears with cotton-wool, to drown / The jabbering set he egged her on to buy). ここには明らかに二人の間の相違が認められる。あるいは、「私」が、本など読まないブリーニーさんとの同化を拒否しようとする姿勢がここに表れているといった方がいいかも知れない。いずれにしても「私」はブリーニーさんの属する世界を遮断して、「私」自身の知的な小さな部屋に閉じ込めようとしているようである。実際彼が無意識に同化しようとしていたブリーニーさんにはどことなく暗いみじめな陰がつきまといっている。'They moved him' は上役が彼をどこかに移したとも考えられるが、最終連との関連で、「死んで運び去られる」あるいは、「病院に運び込まれる」という意味も浮かびあがるであろう。³⁾ また 'Bodies' には「死体」という意味もあることを忘れてはならない。カーテンの状態を表している「薄くて、すり切れた」('thin and frayed') にしても、彼の肉体的、精神的状態を表しているとも考えられるであろう。詩の話者は、そのような彼と同化しようとしている自分を自嘲的に見ているのかもしれない。このような二人の一体化はこの詩において一挙に進展するのではなく、一歩前進しては半歩後退するというふうに徐々に用心深くなされていることに注意したい。第4連の前半でいったんブリーニーさんを突き放しておきながら、後半から第5連にかけてはまた彼の習慣を下宿のおかみさんの言葉を借りながら（ここでもまた労働者階級の俗語的、日

常的言葉が使われている), いくぶん共感を込めて, 淡々と描いている。

第5連からは, これまでと少し趣が異なってくる。文は前の連からの行跨りのため切れていないが, ここから少し明るさが見え始め, 空間も広がり呈すようになる。これまでの場面は息の詰まるような狭い部屋であり, 窓からの眺望も非常に限られたものであった。ところがブリーニーさんはここから何とか脱出しようとしていたのである。あるいは, 彼なりにロマンティックな世界に生きがいを求めていたとも言えよう。ふつうの場面ならばあまりロマンティックな世界とはいえないかもしれないが, これまでのことばが余りにも反ロマンティックなものであるだけに, 第5連のことばでも充分にロマンティックな世界(ここでのロマンティックな世界はラーキン独特の抑制の充分きいた世界であることを忘れてはならない)を喚起することができるのである。ブリーニーさんはサッカーの試合にこつこつ賭けて, 一獲千金とまではいかぬまでも, 彼にとっての大金を夢みていたのかも知れない。また彼のささやかな一年の楽しみは夏と冬(クリスマス)の休暇をフリントンやストークで過ごすことであった。このことに関してティムズはストークは適切だが, フリントンはブリーニーさんにはあまりに上品すぎて似合わないのでラーキンのうっかりミスだと述べているが,⁴⁾ ここはロマンティックな状況を喚起するところであるから, 私はミスだとは思わない。またフリントンという音自体もいかにもロマンティックな響きをする。しかしながら, 'frame' という単語が示しているように, このロマンティックな世界もやはり, 狭い部屋, 小さな庭に比例するように限定されたものになっている。彼は日常生活から離れようとしてロマンティックな世界を求めるが, その世界はやはり日常の陳腐な世界の枠組みの中にはめ込まれているのである。

このことに関して最終連にでてくる 'one hired box' を見落としてはなるまい。「一つの借りた箱」はこのコンテキストでは第一義的にはブリーニーさんが残した「ラジオ」, あるいはなんら価値ある道具もない「借りた狭い部屋」

をさすであろうが、私はこの詩全体の流れを考えると後者をとりたい。こんな年になって人に見せられるものといえは箱のようなみすぼらしい、借りた部屋一つだというのなら、もうこれ以上のことは保証されないであろうことを彼はほとんど確信したようである。そしてこのようなみすぼらしい部屋から彼は棺桶〔これもやはり箱である。第1連の 'Bodies' (死体) の意味が反響している。〕に入れられて運び去られた ('They moved him') のであろう。このように考えてくると「一つの借りた箱」は、より広義には運命がブリーニーさんにもたせた「狭い罫いの中の陳腐な日常生活」、「牢獄のような狭い閉じられた世界」を示唆していることはまちがいないであろう。

やはり最終連に出てくる「いかに生きるかが我々自身の本質を測る」('how we live measures our own nature,' ...) も上で述べたことと深く関わっているように思われる。これはもちろんエリオット (T. S. Eliot) の「ブルーロックの恋歌」('The Love Song of J. Alfred Prufrock') の「私は自分の人生をコーヒースプーンで測り尽くした」('I have measured out my life with coffee spoons;') を思い起こさせる。つまり、'measure' や 'life' ('live') という単語によって両方の詩はそのテーマに関しても結びつけられるのである。「ブルーロックの恋歌」はロマンティックな世界にブルーロックを誘う、彼自身の内部に潜む内なる恋人と、臆病で陳腐な日常生活に埋没する、もう一つの自己との相克の詩であると私は解釈する。⁵⁾ 結局ブルーロックは内なる恋人の誘いにもものれず、退屈な日常生活に埋没してしまう自己に圧倒されてしまうことになる。同様に 'Mr Bleaney' でもブリーニーさんの自己は限定された小さな世界からささやかなロマンティックな世界に逃避しようとするが、一方でその世界はとりもなおさず陳腐な日常生活の延長にすぎないことを詩の話者を含めた我々は認識せざるをえないのである。

ところで最後の二連は、内容的にも文体的にもこれまでの連とは一変する。つまりこれまでは、詩の話者がまわりの状況を淡々と叙述していたが、ここか

らは黙想が展開されるのである。しかも、これまでの明瞭な状況描写とは異なり、その黙想は錯綜しており、不透明である。それを反映してか文体も錯綜をきわめている。そしてここにこの詩を解釈するかぎが潜んでいるように思われる。まず単語のレベルにおいて注目すべきは、ブリーニーさんの寒々とした心の中を反映するかのように 'tousling', 'frigid', 'shivered', 'shaking off' などが使われていることである。これと並行して彼の心の微妙な変化が、1～5連の動詞の少ない文体とは対照的に、小刻みに現れてくる動詞 ('stood', 'watched', 'lay', 'grinned', 'shivered', 'shaking off') に投影されていることも興味深い。また第4連までの反ロマンの要素が薄れ、変わって第5連から抑制されてはいるもののロマンティックな要素がでてきたことは既に述べたが、その流れが最終連の 'watched the frigid wind / Tousling the clouds,' あたりの文体に引き継がれているように思われる。

次にシンタックスに関しては、if 節が問題になろう。多くの読者は「もし彼がたたずんで、冷たい風が雲をかき乱すのを見つめ、……」のように条件節として読み進んでいくであろうが、なかなか帰結節がでてこないため、じらされるはめになる。最後になって予想を裏切られたところで、'I don't know' が出てくるので我々は急ぎょ if を名詞節ととって、'I don't know if (whether)' であったのかと考え直すのである。ラーキンはよく否定表現の名手だと言われているが、ここでもその才能をいかんなく発揮しているのである。否定表現はそもそも肯定につながっていく要素もあることを忘れてはならない。⁶⁾「私は彼を殺していない」と何度も強調すれば、それは強い無実の主張にもなりうるが、同時に疑惑を招くことにもなりかねないのだ。このように否定は相反する二つの意味を内包していると言えよう。「私は知らない」といいながら、同時に 'I know that he stood and watched, ...' といってブリーニーさんのわびしい生き方を充分に知っていることを示唆しているのである。あるいはロビンソン (Peter Robinson) が述べているように、⁷⁾ 'I don't know how he shook off the

dread that ...' というような響きがあることも否定はできないであろう。いずれにしても 'I don't know' を最後にもってくることによって、それが強められ特別な余韻を残す効果をもたらすことは明かである。

ところで最初の我々の反応を重視して if 節を副詞節とし、最後の 'I don't know' を独立文と考えることも可能である。つまり、「もし彼がたたずんで冷たい風が雲をかき乱すのを見つめ、……」といろいろ黙想にひたっていて、最後の所で急に瞑想をあきらめ、「私はもうわからない」と途中で投げ出してしまったとも考えられる。この解釈だと 7 行にもわたる大規模な倒置を考える必要がないが、余りにも最後が唐突すぎて、中途半端な印象を与えてしまう。ウィドウソン (H. G. Widdowson) は、これらの読みのどれか一つに決める必要はなく、二つの曖昧な構文が共存していると主張しているが、⁸⁾ やはり前者が表の意味であろう。

次にブリーニーさんと詩の話者と詩人(ラーキン)との関係を考えていこう。ラーキン自身の伝記的要素を無視するという立場もあろうが、特に彼のような特異な経歴の持ち主の場合には、読者は意識しようがすまいが、どうしても彼自身に引き寄せられて解釈してしまう。詩人自身もそれを計算にいれているふしがある。ラーキン自身を読み込むことによって彼の詩が生きてくる場合も多くあり、この詩の場合もこのことが当てはまるように思われる。周知のごとく彼は一生を独身で通し、大学教師の口があったにもかかわらず、図書館員として一生を過ごした変わり者であった。それは言語障害のためもあったであろうが、それだけではなかったであろう。人前でもったいぶって文学の講義などできる性格ではなかったのではないだろうか。また彼自身あまり外国にも行かず、ハルという田舎町に住み続けたことを考慮に入れると、この小さな部屋に住むことをいとわなかった、あるいは住まざるをえなかったブリーニーさんや詩の話者とラーキン自身とを我々は一体化したい誘惑にかられるのも当然であろう。しかしながら、詩の話者とラーキンとは同一視しても差し支えないであ

ろうが、ブリーニーさんと話者（あるいはラーキン）との関係はこの詩の中心テーマであり、安易に一体化すべきものではない。このことを明確にするためにこれまでの詩の構造を図式化してみよう。

(連) 詩の話者の役割	描写対象	時制	詩の話者とブリーニーさんとの距離
1 場面の傍観者	ブリーニーさん	過去	++ (あり)
	部屋の様子	現在	
2 傍観者	ブリーニーさん	過去	++
	部屋(庭)の様子	現在	
3 参加者	私	現在	縮む
4 参加者	私	現在	++
傍観者	ブリーニーさん	過去	+
	の習慣(日常生活)		
5 傍観者	ブリーニーさん	過去	+
	の習慣(ロマンティック)		
6 傍観者・参加者	ブリーニーさん	過去	縮む
	(私)		
7 傍観者・参加者	ブリーニーさん	過去	縮む
	私	現在	

(2-5 連は行跨りのため、各連は意味の上で明確に切れていない。)

まずこの表からわかるように、詩の話者は第3連から第4連にかけて場面に参入しているが、第4連の後半からすぐもとの傍観者に戻る。同じことが話者

とブリーニーさんとの距離に関しても言えるのである。詩人は、本など用のないみじめなブリーニーさんと自分は違うと思ってみるのだが、独身でわびしい生活をしていることなどを考えるとひょっとして同じではないのかと心の奥底で思い始めるのである。第3連において二人は同化して両者の距離がなくなろうとすると、話者はすぐまたそれにブレーキをかけ、(つまり、ブリーニーさんとはやはり違うと思い直し)、ある一定の距離をおくようになる。このようにして、話者の場面への参入及び二人の一体化は一気に進むのではなく、非常に慎重に一步步進めては半歩後退するというふうに、徐々になされ、最後の二連に至ってようやく詩人の感情移入が見られてクライマックスに達するのである。しかしこの場合でも外面的には詩人が傍観者のポーズをとっていることは忘れてはならない。こうしてみると第1連から第5連までは最後の二連に向けて周到に準備されてきたことがうかがえるであろう。そしてこの最後の瞑想の場面では、二人の同化と相違が、詩の話者の心の錯綜というかたちをとって、みごとに劇化されているのである。詩人がブリーニーさんの心の中をいろいろな想像していくうちに、「彼がたたずんで……また彼のような年になっても、……彼はもうこれ以上の物は保証されないことを……」という言葉の「彼」のところを「私」に置き換えてみても何らおかしくないのではないかという疑問を詩人は抑えることができないのである。読者もまた無意識のうちに「彼」の背後に「私」(詩人＝ラーキン)を感じとっているに違いない。しかしなるほど外観は似ていても、人の内面は外からはうかがい知れないものである。この点に関して第4連にでてくる 'I know his habits' が最後の 'I don't know' と対照的に用いられていることに注目したい。習慣のような彼の外的な側面はよく知っているが、彼の内面深く潜んでいるものが何であるかはわからないという含みが読み取れるであろう。そしてこのことは詩人自身についても言えることなのだ。詩の話者は自分が詩人であるという自負を秘かにもっていて、みじめなブリーニーさんと自分とは外面的には共通点が多いが内面的には大いに違う

のだと叫びたい気もしてくるのである。しかし二人が似ていることを詩人が否定しようとすればするほど二人はますます似てくることもまた否めない事実である。詩人の天から与えられた詩才は、「(天から) 借りた箱」と考えれば、ブリーニーさんの「一つの借りた箱」とあまり変わらないのではないだろうか。いや、変わらないどころか、ブリーニーさんはささやかながらロマンティックな世界への脱出を試みたが、果して詩人はそのようなことができるであろうか。みじめだと思っていたブリーニーさんよりも、実はもっとみじめなのかもしれないではないか。このような詩人の心の中での、ブリーニーさんとの同化と分裂(相違)の緊張が結末において頂点に達するのである。いよいよここに至って、現在と過去が混じり合い、話者は傍観者であるのか当事者であるのか、ブリーニーさんとの距離もなくなったのかあるのかわからず、すべてが混然一体となってしまう。

こうして詩人がみじめなブリーニーさんのわびしい生活や心の中を、自分に引き寄せて思い描きながら、自問自答を繰り返すうちに、'I don't know' を発するのである。ここで第4連の3行目からのこの詩の枠組みが次のようになっていることに注目したい。⁹⁾

I know his habits- ... (イタリックは筆者、以下同じ) (第4連3行目、以下数字のみで表す。)

(*I know*) their yearly frame: ... (5, 2) ('their' は 'his habits' を指す)。

I don't know (if ...) (7, 4)

すると次に示すように、

'I don't know' ... 'I know his habits-' ... No,... no,... no,... no,...
'(I know) their yearly frame:' ...

文末に置かれて強調されている 'I don't know' が 'I know his habits-' や '(I know)

their yearly frame:' と互いに反響し合い、さらに 'know' の中に含まれている [nou] が、これまで詩の中で4回出てきた 'no' [つまり 'no hook' (2, 4) 'no room' (3.1), 'no more' (7.2), 'no better' (7.4)] と響き合うのである。ブルーロックの中にロマンティックな世界に誘う内なる恋人と、陳腐な日常生活に埋没する自己があったように、詩人の中にもブリーニーさんとの相違を強調する声と、両者が似ていることをほのめかす声の二つの異なった声があるのである。そして一方の声に対して、他方の声が、'no!' 'no!' と言って反響し合い、結局相手の声を打ち消そうとしているかのように私には聞こえるのである。しかし最終的にはブルーロックが退屈な日常性に埋没していったように、この詩の最後の場面で、詩人もまた小さな閉じられた世界（借りた箱）の中で暮らしていかざるを得ないことを悟り、やはりブリーニーさんとあまり変わらないのではないかという思いの方が強まっていたことは否定できないであろう。こう考えると 'I don't know' には自分のみじめさに対する強い自嘲の念がこめられているように思われるのである。

以上見てきたように、この詩が成功しているのは、自嘲をおびた詩人のみじめな気持ちだが、淡々としたおさえた筆致で、とりわけ 'I don't know' のようなすり切れた日常的なことばによって感傷を排すことにより、かえって含蓄豊かに表現されている点にあると思われる。（このことに関しては最後の瞑想の場面で、詩人の強い感情移入があるにもかかわらず、外面的には彼が傍観者のポーズをとっていたことが大きい。）また 'I don't know' は「知っている」と「知らない」という相反する意味を同時に含みながら、その間を揺れ動く詩人の感情を微妙に制御しているのである。まさにこの詩はこの句によって成り立っていると言っても過言ではあるまい。このようなありふれた言葉が詩の中でこれほど大きな働きをしている例を私は他にあまり知らない。

註

*本詩は Anthony Thwaite 編, *Philip Larkin: Collected Poems* (London: The Marvell Press and Faber and Faber, 1988), pp. 102-103 による。なお本稿を書くに当たって George Hughes (藤井治彦 註解), *Contemporary British Poetry* (英宝社, 1989) 中の本詩の解説 pp. 19-28 及び註解 pp. 114-117 が役立ったことを記しておく。

- 1) David Timms, *Philip Larkin* (Edinburgh: Oliver & Boyd, 1973), p. 97.
- 2) テレビの可能性もある。ラジオかテレビかに関しては Hughes, p. 115 や Peter Robinson, 'Philip Larkin: Here and There' 『英文学評論』第59集, (京都大学教養部英語教室, 1990) p. 38 の註41などに言及されているが, この詩が, 1955年に作られたことを考えるといくら下宿のおかみさんをそそのかして買わせたといってもテレビでは高価すぎるし, この下宿にもそぐわないような気がする。
- 3) Timms, p. 98.
- 4) Timms, p. 98. なおフリントンはラーキン自身の 'Not the Place's Fault', *Umbrella*, 1, 3 (Summer 1959), p. 111 の次の箇所に言及されている。
As I get older I grow increasingly impatient of holidays: they seem a wholly feminine conception, based on an impotent dislike of everyday life and a romantic notion that it will all be better at *Frinton* or Venice. (イタリックは筆者)
- 5) 拙稿「ブルーロックの恋歌」『菅 泰男・御興員三 両教授退官記念論文集』あばろん社, 1980, pp. 625-639.
- 6) Hughes, pp. 26-7.
- 7) Robinson, p. 26.
- 8) H. G. Widdowson, 'The Conditional Presence of Mr Bleaney' in *Language and Literature*, Aspects of English Series, ed. Ronald Carter (London: George Allen & Unwin, 1982), p. 24.
- 9) Christopher Ricks, *The Force of Poetry* (Oxford: Oxford University Press, 1984) p. 281.